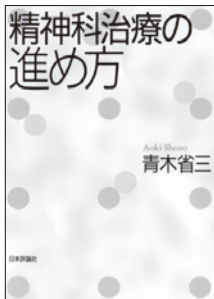


■ 書 評



精神科治療の進め方

青木省三 著
日本評論社
2014年6月 248頁
本体価格 2,300円+税

薬物療法や専門的な精神療法の知識・技術を患者さんに適用する前に、基本的な患者さんと患者さんを取り巻く状況を把握して、患者さんや患者さんを取り巻く人々の気持ちを受け止め、支えることができるような関係を築けなければ、専門的な知識・技術は功を奏さないばかりか、害悪を引き起こすことさえあるということは、しばしばいわれることです。また、患者さんを疾患にばかり目を向けず、全人的に把握し、かわらなければいけないということもよくいわれることです。しかし、基本的なことこそ、身につけることが難しく、疾患病態や薬物療法、特定の精神療法の理論、知識、技術については体系化されたものを学ぶことができますが、根底にある人と人とのつながりに関することや全人的な考え方となると、治療者各人が生来培った感じ方、考え方、関係の取り方の習慣をベースとせざるを得ない面があり、臨床現場の中で、その習慣に、気付き、工夫、努力を重ねて修正したり、押し広げたりしていく必要があるもののように思います。

基本的な面接、診療の姿勢、あり方を学び、考え、振り返るために、土井健郎先生、笠原嘉先生、中井久夫先生、神田橋條治先生、成田善弘先生などをはじめとする先達による数々の良書があります。本書もまさにこのような役割ももつ書籍だと思いますが、本書は特に、いかに患者さんが自然に回復する力を妨げないように、その力を発揮して生活を充実させていけるかという精神科医にとって重要な姿勢に焦点が絞られており、この重要なながらも一朝一夕には身につかない姿勢が、読み進む程に、また、折に触れて読み返す程に身につくように注力された書物であるように思います。また、本書は、今の時代の精神医療の現場に即して書かれているだけに、ストレートに同時代の読者

に届くところが大きいのではないのでしょうか。その一方、非常に基本的な姿勢をテーマとしたものですので時代が変わってもその意義が薄らぐことはないでしょう。

本書は、序章「精神科治療を始める前に何を考えるか」、第1章「はじめのやりとり」から入って、第2章「問診の進め方」、第3章「経過を読む」、第4章「精神療法の基本」、第5章「基盤としての支持」、第6章「治癒転機-人が変わるとき」までの総論部分に精神科治療を進める上で筆者が最重要と考える基本姿勢が具体的に書き出されています。特に第5章は支持的精神療法の重要性和奥深さを示唆する本書の核心ともいえるように思います。

その後、7～16章は、「うつ病・抑うつ状態」「双極性障害」「躁うつと人生」「パニック障害」「摂食障害」「身体表現性障害」「境界性パーソナリティ障害」「成人期の自閉症スペクトラム」「中年期、老年期の自閉症スペクトラム」と各疾患にあてた章が続きますが、これらは、各疾患に対して別個の理論やノウハウを示すという意味での各論とされている訳ではなく、あくまでも、本書のテーマの基本的な考え方をどのように実際の臨床現場で使うかということを丁寧に説明することに主眼が置かれているように思われ、実際これらの章を読むことで、そのイメージが広がります。とはいえ、各章とも、疾患病態について考える上でもハッとさせられる記載が随所にあります。特に、双極性障害と自閉症スペクトラムについては、別途、章を分けて2章分記載されているだけあって、とりわけ示唆に富むところが多く感じられました。さらに、続く16～18章で、家族に対する支援のことと、スーパービジョンのあり方についても、本書の観点から論述されています。また、最終章に、本書のテーマが簡潔に要約されていて、本書を読み通した後、振り返るのに役立ちます。

全体を通して多くの症例のエピソードが効果的に入っています。各エピソードを読むことで、テーマが腑に落ちるとともに、ディテールにも有益なヒントが散りばめられています。ぜひ、多くの皆様手に取って頂きたい書物です。

(富田博秋)